シャンティ山口 ニュースレター　第 133 号
発行：2017 年４月１日/発行責任者：特定非営利活動法人 シャンティ山口　代表 角　直 彦
連絡先事務局 〒753-0221 山口市大内矢田北３丁目 9-1　佐伯昭夫　電話/Fax 083-927-4083
ホームページアドレス：http://www.shanti-yamaguchi.com/

「第６回毎日地球未来賞」表彰式・受賞記念講演会 報告

「タイ北部・国境地域で暮らす民族の自立支援活動」

特定非営利活動法人シャンティ山口
事務局長理事　佐伯昭夫

1.　はじめに

ご挨拶

次に、シャンティ山口の団体概要と事業報告を説明いたします。

2.　活動報告

（１）団体概要

リーフレットにも「シャンティ山口の歩み」の中でご紹介していますが、前身は、現在の公益社団法人　シャンティ国際ボランティア会（SVA）山口県支部で、設立者は、山口県周南市曹洞宗「原江寺」住職で有馬実成師であったことも相まって、当時山口県支部は、先頭に立って現地活動を支援してきました。

組織が大きくなるとともに１支部での活動は、現地支援先の情報も薄れがちとなりはじめたため、「きめ細かで小回りがきき」さらには「顔の見える活動がしたい」との思いがつのり 1993 年、新たにシャンティ山口を結成し、SVA の事業の一部であるラオス難民の少数民族自立支援を担当することとなり今年５月で２４周年を迎えます。

（２）事業の始まり

新たに団体を結成した具体的な目標。ラオスから逃れた難民たちが違法入国者としてタイの山岳部国境地帯で暮らしていることからタイ政府は、反政府活動や違法行為をおそれ強行な定住化作戦をとり、山岳地から、耕作地のない定住地におろされました。

この作戦では多くの犠牲者を伴いました。低地におろされても農地もなく、タイ人の農家や日雇い労働者としてその日暮らしが精一杯でした。

そんな過酷な生活を強いられている時期、1993 年３月、モン族の暮らす定住地「センサイ村」を出発点として民族自立のためのお手伝いを始めました。

１）エコトイレ事業に至った経緯と設置状況

センサイ村を訪問した時期が６月の雨期まっただ中のある日のこと、いつも保育園に寝泊まりし園児が来る頃には寝具を片付け、村の調査活動をしていましたが、その日は日曜日で保育園が休みだったので園児は、各家庭で過ごしていました。

子供たちの家庭での様子を調査するため雨上がりの直後村を巡回していましたところ、水たまりでぬれながら遊んでいる子供を見かけ近づいて声をかけた瞬間「ぴちゃぴちゃと」遊んでいるものを見て驚きました。そのものは、**「うんこ」**でした。あたりには、沢山の汚物が流れ出していることを目撃しました。

これは大変だと思いながら村を歩くと、さらにトイレのある家の近くには、同じように糞尿が流れ出していました。

当時村では、回虫にむしばまれ栄養失調の子供や伝染病が原因の高熱により多くの死者や、高熱による脳性麻痺で苦しんでいる状況のさなかでしたので「もしや」と疑い詳細調査の結果**「トイレが原因であることを突き止め」**確信しました。

さて、それから**「安全で経費がかからず管理の容易なトイレ」**を作らなくては、と思いつ

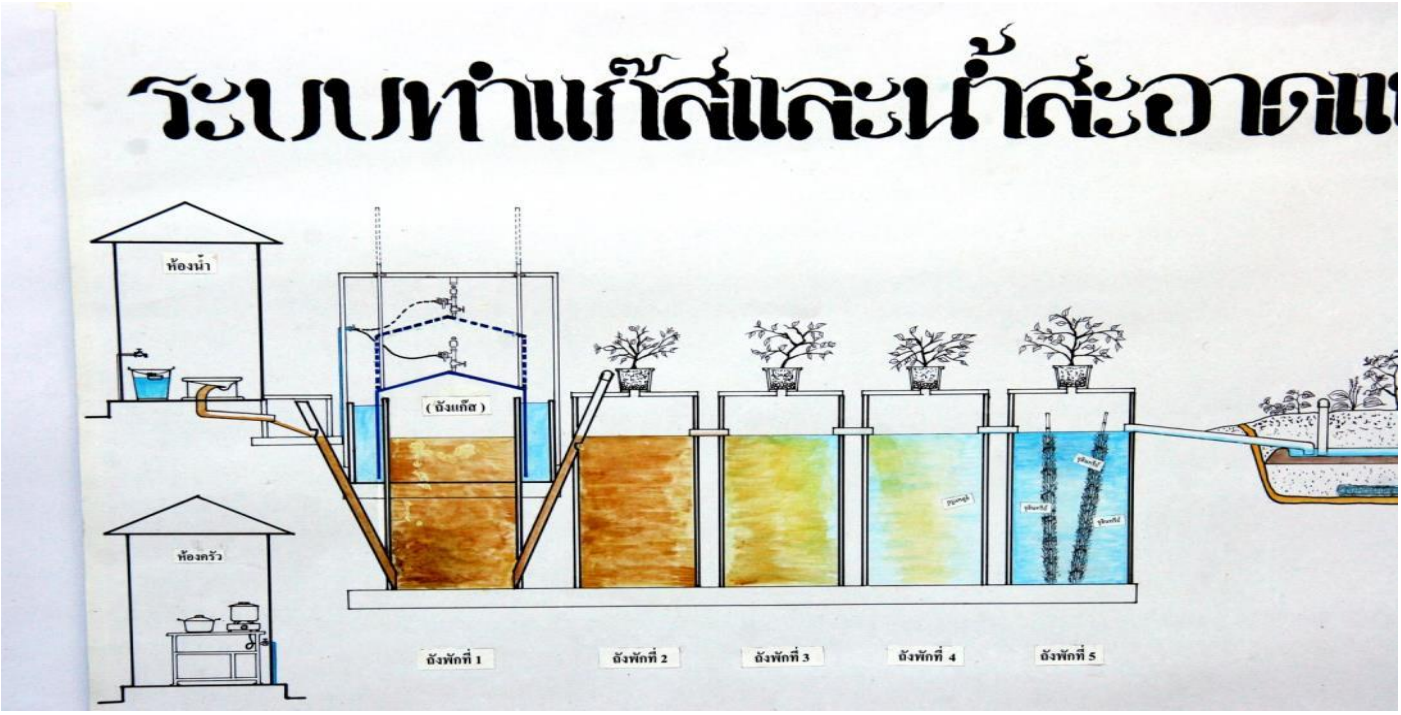
いたのは、私が少年時代父親と一緒に市場に出荷する為の野菜作りに自宅の便所の処理を兼ね肥料にするため肥だめがありました。

肥だめは、数ヶ月人糞を寝かせ、発酵が進んで大腸菌や回虫が死滅してから希釈して野菜にかけていたことを思い出し「これだ！」と直感しました。

思いついて日本に帰ってから、いかに自然素材を使い資材を少なくまたお金もかけず、更には、地域住民の手で容易に作れ、維持管理の不要なものをと考えました。が、日本でのハイテクが頭に残りなかなかアイディアが浮かんで来ませんでした。現地に行きこれまでのハイテクの延長を断ち切り、タイの農村にふさわしく、いかに「何もせずに自然に近いトイレづくり」究極のローテク（eco）をめざしたシステムを開発することに熱中しました。

それからシステムとして**試行錯誤を繰り返し**試作から３年目ようやく 2005 年に理想とするトイレ第１号をセンサイ村に完成することができました。

２）保育園 100 人規模のトイレの見取り図・原理説明　　平成 22 年(2009)３月完成



嫌気処理によりメタンガス発生⇒自然浄化・好気処理⇒微生物浄化⇒微生物増殖浄化⇒畑へ

畑⇒処理完了液体⇒肥料分・水分⇒作物を介して吸収発散・施肥⇒残留水⇒飲料可能

ホイプム村保育園での「ガス点火式」

3.現地活動のかたわらで

1）村の不良少年が１年間手伝ってくれた

貧困と家庭の事情で教育を受けられなかった村の不良少年（18 歳）５人がプロジェクトが始まってから工事現場を遠巻きにみながらたむろしていた。

村人からは、厄介者としてレッテルを貼られ素行もよくないようで毎日ゴロゴロとしていた。

私は、この若者たちの行く末を案じた。

もったいないとも思い工事開始から３日目、声をかけた。

すると意外にも手伝いがしたいといって、穴掘りを任せた。

みんな元気な若者なので休憩もせず、村人の倍以上専念した。

お昼のご飯の時良くやったことを人一倍ほめてやった。

昼ご飯のおかずに蛙を捕ってきて火をおこして焼いてくれた。

一番大きなおいしい蛙を私にくれた（ありがとう！ありがとう！）

昼からまた、人一倍精を出した。

おかげで２日分がはかどった。

日当を支給するなり、村のお店に一目散にいってビールを買ってきてみんなで飲もうといって持ってきた。

彼ら自身が働いて得たお金でみんなにおごったことが誇りのように笑顔を振りまいた。

「みんなようがんばったね、おかげではかどった、明日も頼むね！」と言ったものの明日は来るのか？・・・・

次の日現場に到着するとすでに５人そろってしかも家の自前のクワを持っていち早く来ていた。

自分が汗を流して得た報酬は、何物にも代え難い魅力だと。働く喜び、学ぶ喜びを彼らは、初めて体験した。

それ以来、必要なとき声をかけ必ず参加してくれた。とうとう完成まで１年間つきあった。

家族を始め、村長さんから感謝された。村が明るくなった。

その後も彼らは、率先して家の手伝いや村の協働作業に専念しているそうである。

作業に専念する少年達

お昼休みの昼食

２）日本語を覚えてくれたサーちゃん

今日をどう生きるか！明日があるのか？

貧困で学校に行けないサーちゃん（１０歳）は、毎日のように幼い弟を連れて現場に来て手伝いをしながら子守をし、日本語を覚えてくれた。

この子と同じ境遇の子供たちは、希ではない。
親は、家族そろって食べることができはじめると次は、子供の就学を願って賢明に労働に励む。
親の願いは、自分たちに叶わなかった夢「希望を持って生きられること」をこの子に託した。

クンガムラン村の保育園のトイレが完成間近いある日のこと、私が来ていることを聞いて、久しぶりにこの子がやってきた。

「コンニチワ、センセイ！」「ライシュウカラ、オカアサンガ、ガッコウニイッテモイイッテ！！」いつもと違う笑顔で自慢した。
「そうなん、よかったね！」わたしは、いつも心配していただけにとめどなく涙があふれ、サーちゃんの顔が見えなくなった。サーちゃんも泣いていた。

その後この子は、現場に来なくなった。

本当に学校に行っているのだろうか心配していたが、３月はじめ完成を終えて現場から帰る途中、学校の制服を着たあの子が、道ばたでとびっきりの笑みで手を振った。
「また来るよー！げんきでねー！」・・・

日本語を覚えてくれたサーちゃん

いつも弟の子守をしながら手伝ってくれた

３）ホイプム村の障害者「ドントリーさん夫婦」

ホイプム村のプロジェクトが、始まって以来現場事務所に来て時々お手伝いをしてくれている視覚障害者の「ドントリーさん」（２９才）片目がかろうじて見える程度で他人の顔などは、識別できず声や雰囲気などで判断して居るため私もしばらく覚えてもらえず、３ヶ月後くらいにようやく日本人が居ることを知ったようである。　いつもラジオと二人暮らしで片時も離さずニュースや音楽に集中している。彼がやってくると音楽ですぐ分かる。身よりは、居ない。村人の皆さんの少しのお手伝いで食事にありつけその日暮らしで精一杯である。

しばらく来なかったのでスタッフに「ドントリーさん」来ないねーどうしたの？」と聞いたらスタッフが笑って「ラジオの他にいいことがあったみたい。」と言いました。「ナン」だろうなーと思いよく分からなかったが。その次の日の寒い夜、いつもと違う音の音楽が聞こえて来ました。それは、「ドントリーさん」でしたが、誰かにもらった音色の違う小型スピーカーからの音楽でした。事務所に入るなり寒そうにしていたので私の防寒着を、プレゼントしました。彼はありがとうと言うなりすぐさま手探りで身につけて、外にでていき、しばらくすると女性と共にまた、入ってきました、見ると先ほどプレゼントした防寒着は、彼女に着せられ二人が私の前に立って居ました。彼女の首には、ラジオ彼は小型スピーカーを、ぶら下げて私へ結婚の挨拶にきたのでした。彼の名前は、「ソンペット君」「ドントリー」は、タイ語で音楽のことを言います。「ドントリーさんは、私がつけたニックネームです。」奥さんは、知的障害を持ちほとんど話はできない様です。でも良かった、これから長い人生を生きていく上で毎日を楽しく二人三脚で力を合わせ頑張ってね。

彼には、今年度、配分した材料でのトイレ建設が待っていました。みんなのトイレの完成間近な２月「ドントリーさん宅を訪問したところ、トイレ建物はすでにできでき上がり夫婦で穴掘りの真っ最中でした。建物を村の人たちに作ってもらたのだと思いきやよく見ると「がたがたで」今にも落ちそうなブロックが積まれていました。村の人に聞いてみると「みんなで作ってあげると相談したが」「大丈夫です。もう一人ではないからできることは、妻と二人でやります。」と言ってすべて二人で作ったそうです。すごいできばえとはいえませんが雨風しのげる「本当にすばらしい二人のトイレができました。」「ドントリーさん夫妻に大きい花まるシールをつけてあげました。」

ドントリーさんが奥さんにプレゼントした古いラジオと小型スピーカーそして二人で作り上げた新しいトイレと一家４人？の自立した暮らしがこれから始まります。
村の皆さんお世話になりますどうぞ二人を見守ってあげてください。

この子たちが教えてくれたこと、そして事業を通じて教わったことは、
「日本の無駄への再認識と改めての驚き」
「未来の夢は、今日をしっかり生きること」
そして「支援は、絆づくりに尽きること」である。

4.展望　・世界に羽ばたけ日本の知恵

シャンティ山口の独自の理念「支援は絆づくり」に基づいた支援のあり方に、多くの人たちの賛同を得て研究開発し事業をこなすことができました。

そして大きく成功に導いたのが助成資金援助いただいた独立行政法人環境再生保全機構「地球環境基金」を中心に「今井記念海外協力基金」の支援がなしえた成果とお礼を申し上げます。

開発途上国といわれている地域に限らず、地球環境の保全は、急務であり森林の減少による洪水災害、水資源の枯渇、生活排水による河川、湖沼の汚染は、近年著しい状況です。

一刻も早く、「発生源で元を絶つ」ことで解決しなければ、自然環境は破壊され、修復ができなくなります。

しかしすでに遅し、ですが、今すぐであれば、まだ、何とか間に合う可能性もあります。
「発生源で元を絶ち、循環させていく」というコンセプトによって設計した本システムが、
今後、アジアを中心に世界各国の事業としてはばたいていってほしいと切に願っています。

5.現在取り組んでいる事業

①「トウモロコシ栽培で荒廃した農地を果樹林に」森林再生と農村開発。（地球環境基金助成事業、３年継続）（ホイプム村）

② 「地域と協働連携による生活環境実態調査」と生活環境保全（地球環境基金助成事業、３年継続）（ホイプム村・ホイドウア村）平成 29 年度より地域保健所管轄の 10 村を追加。
連携組織メンバー：社会教育事務所・役場・保健所・病院・山岳地域巡回医療チーム（ロイヤルプロジェクト）・森林局・国境警備隊・地域ボランティアグループ・保健所管轄の各村長

③ タイ北部山岳地域ホイドウア村の森林再生と農村開発（緑の募金公募事業、３年継続）（ホイドウア村）

④ その他緊急を必要とする用務。（山間部の保育園・地域の村・臨時調査）

6.おわりに

シャンティ山口の活動指針

「人の痛みを自らの痛みとし、
人の苦難を自分自身に関わりのある問題として受け止め
解決に向かって行動していくこと。」

いつも皆さんに機会があるたびにお願いしていることですが、未来を担う子、孫、ひ孫のためと思って自分にできること、何でもかまいません実践してください。

実践無くしては、何も始まりません、何も解決できません。
考える時間を費やすより、まずは、実践しながら考えて行動されることを望みます。

～共に生き・共に学ぶために～

「なぜ?」「どうして?」

世の中の出来事に関心を持ち　そして疑問を持ち
知恵を出し合って　みんなで考え
宗教・民族・国境を超え ひとり ひとりの人間として
自分にできる 身近なことから

実践しなければ～

～何も変わりません

地球の未来は
・・今を 生きる 私たちそのものですから・・

170212saeki